

昔の写真や映像を観ると、隅っこに映っているラヂヲの型や壁に貼られたメニューなどに目がいってしまう。支那そば 20 円、珈琲 40 円。舶来物が高いのかラーメンが安いのか、ラヂヲから流れ出るのは二代目広沢虎造のオハコ「森の石松三十石船道中」か。

「God is in the details/神は細部に宿る」の格言通り、隅っこにその時代の空気や匂いを感じる。聖書の神も、細部に宿っていることがある。

嬰兒モーセとファラオの王女の間に入って、弟モーセの命を救った幼い姉がいた(出エジプト 2:4,7~8)。少女の頃から聡明だった姉の名はミリアム。上の弟がアロンで(15:20)、下の弟がモーセ。やがてミリアムは、旅する民の中で女たちの先頭に立って、命の輝きを鼓舞する女預言者になった(15:20)。

モーセは民を率いて旅をするという重責に耐えられず(民数 11:14)、「どうかむしろ(私を)殺してください(11:15)」と神に訴える。

命の喜びを体全体で表す姉ミリアムと違って、弟モーセにとっては責任や矜持が命に勝っているらしい。これは、女と男の違いなのか、立場の違いなのか。何とも言えないが、モーセの父性(モーセと一神教=7011)は、ミリアムと比較することでいっそうくっきりする。

姉ミリアムと兄アロンは身内の気安さからか、弟であるモーセの問題を遠慮なく指摘する(12:1)。その一方、重責を一身に負うモーセを心配して、自分たちもそれを担おうとする(12:2)。このことが神の怒りを買ひ、不公平にも姉ミリアムだけが裁きを受ける(12:10)。

らい病に罹患したミリアムは宿営の外で7日間、隔離された(12:15)。しかし「民は、彼女が戻るまで出発しなかった(12:15)」。

ミリアムが戻るまで出発しない民。短い、実に印象的な報告だ。それほどに民は、ミリアムのことを心にかけていた。死をもちらつかせて冒険を強権的に迫るモーセに較べて、辛い旅であっても命の輝きを体全体で表現するミリアム。

さらに彼女は、宿営の外に隔離されていた少なからぬらい病患者と共にいた。これも民の中におけるミリアムの重要な位置だ。モーセというゴリゴリの権力に物申し、民の最底辺に身を置くミリアムには、千数百年後に現われるイエス・キリストのおもかげがある。

「夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た(マタイ 8:16)」。人々は安息日が開ける夕方になるまで待っていたが、イエスはそんな律法よりも命を優先して、安息日でも癒しをおこなっていた(8:15)。

病はどのようにして癒されたのか。「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。[彼はわたしたちの患いを負ひ、わたしたちの病を担った](8:17)」。

私たちの病は、キリストが代わりに担って下さることで癒される。私たちの罪も、キリストが十字架で負って下さるがゆえに赦される。

神の息である私の命がいっそう輝くよう、神が与え給うた私の命が私の姿らしく燃え尽きるよう、担って下さっている。そのためにイエスは十字架を負われたのだ。

ミリアムは罪を負わされたが、アロンの方はおかまいなしだった(民数 12:10)。ミリアムが負った罪は誰のものか。モーセあるいは民の罪ではなかったか(12:1)。

ミリアムとアロンは「我々を通して語られるのではないか(12:2)」と言い、これを「主は聞かれた(12:2)」がゆえにミリアムは罪を負った。民が息災なのは、隔離された者たちが病を肩代わりしているから。その病をイエスが命を賭して負う。



#### 《おまけのひとこと》

キリストの体たる者にとって 姉弟の病は元々私のもの 私の病も兄妹のものかもしれない がん哲学のカフェで皆の話を聞いて淡々と予感する キリストは生きた体としてここで呼吸している